

徳島市立学校適正規模・適正配置等検討委員会

**第 4 回
会 議 資 料**

徳島市役所 11階 1101会議

令和7年7月25日（金）午前10時から

徳 島 市

会 議 資 料

【目 次】

議題 1 適正規模・適正配置等に向けた検討（第 3 回）

1 アンケート調査の回答内容について～抜粋～	1
(1) 学校規模に関する項目	1
(2) 学級あたりの児童生徒数に関する項目	6
(3) 通学距離・時間等に関する項目	10
(4) 適正規模・適正配置で重視すべき項目	13

議題 2 答申書について

2 答申書(素案)	18
-----------	----

参 考 一 別 冊 アンケート調査の回答内容

1 アンケート調査の回答内容について ～抜粋～

(1) 学校規模に関する項目

Q. 小学校の 1 学校(1 学年)あたりの学級数は、何学級が望ましいと思いますか。(単位：%)

No	回 答	全 体					小規模校(区)			
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	小学生 2,779人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	小学生 269人	教職員 147人
1	(1 学年 6 学級)	—								
2	(1 学年 5 学級)	—								
3	(1 学年 4 学級)	—			27.1				4.1	
4	1 8 学級程度以上(1 学年 3 学級)	50.0	56.1	43.5	40.5	48.8	18.4	23.5	16.7	33.3
5	1 2 学級程度(1 学年 2 学級)	50.0	30.2	38.6	24.6	44.2	50.2	45.1	26.8	51.7
6	6 学級程度(1 学年 1 学級)	8.3	4.7	9.7	6.6	3.8	18.4	23.5	50.6	11.6
7	4～5 学級 ※複式学級あり		3.4	2.9		1.5	1.4	2.0		0.7
8	2～3 学級 ※複式学級あり		4.9	4.3		1.5	8.8	5.9		2.7
9	1 学級 ※複式学級あり		0.7	1.0	1.2	0.3	2.8	—	1.9	—

Q. 小学校の 1 学校(1 学年)あたり、少なくとも何学級が必要だと思いますか。(単位：%)

No	回 答	全 体				小規模校(区)			
		保護者 2,811人	地 域 207人	小学生 2,779人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	小学生 269人	教職員 147人
1	(1 学年 4 学級)			16.2				2.2	
2	1 8 学級程度以上(1 学年 3 学級)	27.5	20.8	34.5	16.9	6.0	5.9	4.5	9.5
3	1 2 学級程度(1 学年 2 学級)	44.3	39.6	38.2	44.0	35.0	39.2	33.5	40.1
4	6 学級程度(1 学年 1 学級)	19.0	30.0	9.8	34.3	45.2	52.9	57.6	44.2
5	4～5 学級 ※複式学級あり	2.5	2.4		1.6	0.7	—		0.7
6	2～3 学級 ※複式学級あり	5.5	4.3		2.3	8.8	—		3.4
7	1 学級 ※複式学級あり	1.2	2.9	1.2	0.9	4.2	2.0	2.2	2.0

- 全体回答:小学校の望ましい学級数は 18 学級(1 学年 3 学級)程度であり、少なくとも 12 学級(1 学年 2 学級)程度が必要。
- 小規模校回答:望ましい学級数は 12 学級(1 学年 2 学級)程度、少なくとも必要な学級数は 6 学級(1 学年 1 学級)程度という結果に。

Q. 中学校の1学校(1学年)あたりの学級数は、何学級が望ましいと思いますか。

(単位：%)

No	回 答	全 体					小規模校(区)			
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	中学生 4,059人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	中学生 443人	教職員 147人
1	(1学年7学級以上)				17.2				3.0	
2	18学級程度以上(1学年6学級)	25.0	26.3	17.8	20.6	18.1	9.9	5.9	1.4	8.2
3	(1学年5学級)	33.3			27.1				7.0	
4	12学級程度(1学年4学級)	33.3	38.7	27.1	18.3	42.2	31.1	21.6	15.8	27.2
5	9学級程度(1学年3学級)	33.3	23.2	28.0	11.3	27.3	24.0	33.3	49.2	36.1
6	6学級程度(1学年2学級)	25.0	6.8	18.8	2.7	9.7	18.7	25.5	12.4	21.8
7	3学級程度(1学年1学級)	8.3	3.8	7.7	2.1	2.4	11.7	13.7	10.8	6.1
8	2学級程度 ※複式学級あり		0.8	—		—	2.8	—		—
9	1学級 ※複式学級あり		0.4	0.5	0.8	0.3	1.8	—	0.5	0.7

Q. 中学校の1学校(1学年)あたり、少なくとも何学級が必要だと思いますか。

(単位：%)

No	回 答	全 体				小規模校(区)			
		保護者 2,811人	地 域 207人	中学生 4,059人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	中学生 443人	教職員 147人
1	(1学年7学級以上)			9.0				1.9	
2	18学級程度以上(1学年6学級)	12.2	10.1	11.9	8.2	4.2	2.0	0.7	1.4
3	(1学年5学級)			21.0				1.8	
4	12学級程度(1学年4学級)	26.5	16.9	23.1	19.3	13.4	11.8	5.4	16.3
5	9学級程度(1学年3学級)	29.4	25.6	22.1	25.2	26.5	31.4	42.9	21.1
6	6学級程度(1学年2学級)	19.2	28.0	9.4	28.2	24.7	23.5	33.4	33.3
7	3学級程度(1学年1学級)	10.4	17.4	3.0	17.8	23.3	31.4	13.8	26.5
8	2学級程度 ※複式学級あり	1.3	1.4		0.8	4.9	—		0.7
9	1学級 ※複式学級あり	0.9	0.5	0.5	0.8	2.8	—	0.2	0.7

■全体回答:中学校の望ましい学級数は9～15学級(1学年3～5学級)程度であり、少なくとも6学級(1学年2学級)程度が必要。

■小規模校回答:望ましい学級数・少なくとも必要な学級数ともに9学級(1学年3学級)程度という結果に。

Q. 学校での「クラス替え」は必要だと思いますか。

(単位：%)

No	回 答	全 体						小規模校(区)				
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	小学生 2,779人	中学生 4,059人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	小学生 269人	中学生 443人	教職員 147人
1	そう思う(必要)	58.3	66.4	67.1	64.8	67.5	73.6	40.3	58.8	21.9	55.1	59.2
2	どちらかというと思う (どちらかという必要)	33.3	25.8	19.8	13.5	13.3	21.7	37.5	19.6	13.8	14.4	27.9
3	どちらともいえない(わからない)	—	6.1	8.2	8.9	10.8	4.2	15.9	11.8	20.4	14.9	11.6
4	不要(どちらかという不要)	8.3	1.0	3.4	5.5	4.5	0.5	3.5	5.9	12.3	5.6	1.4
5	そう思わない(不要)	—	0.8	14.5	7.2	3.9	—	2.8	3.9	31.6	9.9	—

Q. 上記回答の理由として、当てはまるものをお選びください。

(単位：%)

No	回 答	全 体				小規模校(区)		
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	教職員 147人
1	児童生徒同士や児童生徒と教員との人間関係に配慮したクラス編成ができる	25.0	27.7	22.2	52.5	18.8	15.7	44.2
2	児童生徒に新たな人間関係を構築する力を身につけることができる	25.0	43.3	34.8	24.7	39.1	39.2	24.5
3	児童生徒が多様な意見や考え方に触れる機会が多くなる	33.3	14.2	16.9	10.9	18.1	9.8	10.2
4	クラス替えを契機として児童生徒が意欲を新たにすることができる	25.0	5.1	9.2	7.5	5.1	9.8	8.8
5	クラス内の仲間意識の高揚とクラス同士が切磋琢磨する環境をつくる ことができる	25.0	1.2	3.4	0.9	2.5	5.9	1.4
6	児童生徒同士のつながりが深まりやすい		3.2	5.8	1.5	8.3	5.9	5.4
7	児童生徒がクラス替えによる環境変化のストレスにさらされずに済む		3.9	3.9	1.3	8.0	3.9	4.1
8	その他		1.4	3.9	0.7	2.5	9.8	1.4

■クラス替えは小規模校の小学生を除き、すべての属性で“必要”という結果に。

■クラス替えを必要と考える理由

第1位：児童生徒に新たな人間関係を構築する力を身につけることができる

第2位：児童生徒同士や児童生徒と教員との人間関係に配慮したクラス編成ができる

第3位：児童生徒が多様な意見や考え方に触れる機会が多くなる

【その他、学級数に関する主なご意見】

<保護者>

- 小学校のうちはある程度小規模（1学年1～2学級）が良いと考えます。子ども一人一人の活躍の場が作りやすく、それにより自己肯定感が高まります。中学校は人数を増やして切磋琢磨する力も必要と考えます。
- （小規模校は）分校扱いでほかの学校の校長が統括してはどうか。または思い切って、今後5年以内に全校児童生徒が20人を切るなら廃校し、オンライン（遠隔）授業もしくは転校となるなどの方針を示すべき。
- 児童生徒の性質・性格が関係してくるもので、大規模校・小規模校のどちらもあっていいのではないかと思います。
- 学校の場合によって「適正規模」は違ってくると思います。すべてを一括りのルールで決めてしまうのではなく、地域の状況に合わせたいくつかの「適正パターン」があっても良いのではないかと思います。
- 小規模すぎても大規模すぎても支障はあると思います。子どもたちがのびのびと、でも働く教職員にも無理がない働き方で続けられることが大事だと思います。
- 学年1クラスは避けてあげたい。狭い人間関係が良いこともあれば、最悪となることもあることを忘れてはいけない。
- 少人数の学校で自分も子供も学校生活を送ってきました。ある程度の人数の中で学校生活を過ごした方がいいと考えるので、適正規模・適正配置に賛成です。

<地域住民>

- その地域の特性に合わせた規模・配置とすべきと思う。
- せめて1学年1学級以上の規模での編成を望みたい。そのための統合はあってもいいと思う。
- 地域の特色として小規模校も残し、小規模のメリットを生かした教育環境を考えてほしい。
- 少子化が進展しているニュースが毎年のように続いている。将来の人口に合わせて学校の配置や規模を変えることは避けられないと考える。学校の適正規模や適性配置を考えるにあたっては、大人になれば競争社会かつコミュニケーション能力が必要になるため、ある程度の規模（2学級以上）は必要であると思う。教科担任制の導入や先生の働き方改革のため、先生の業務負担を軽くする（そして求人が多くなって良い先生を呼び込む）意味でも、学校規模はある程度大きくするほうが良いと思う。

<教職員>

- 小規模校ならではのよさもあると考えます。クラス替えがある学校が合う児童・生徒もいれば、小規模校が合う児童・生徒もいると思います。競争があるがゆえに、学校に通えない児童・生徒もいるでしょう。一律な適正規模・適正配置ではなく、小規模校も残すというような、柔軟な対応があってもよいのではないかと考えます。その際、阿南市吉井小学校のように全市を通学学区にする、また、すだち学級のような適応指導推進施設を併設するなど、従来の学校の枠をこえた柔軟な発想で、地域の特性を活かし、かつ、様々な児童が通える学校の配置ができたらと願います。

- 校務分掌のことを指して小規模校は大変というが、日々の生徒指導と授業数を考えると給与にも差をつけてほしいとさえ感じる。
- 小規模校になると教員一人一人の分掌が多くなり、働き方改革が進められる中逆行してしまうのではないかと思います。子どもたちにとって、意見交流の相手が限られてきたりと学びを深めることが出来ないと思います。地域の意見、保護者の意見、教員の意見をないがしろにしないでほしいです。
- 一概に何が小規模はダメで大規模もダメとかいうことはないが、その土地にいる子どもがどうしたいかを考えて学校を継続するのか休校にするのか等を考えていいのではないか。1 小学校 1 中学校の場合、人間関係が固定されすぎていて、学年が上がれば上がるほど、しんどさがでていくように思う。地域的なこともあり、なかなか統合は難しいが、教育内容を充実するに当たってある程度の児童数の確保は大切だと考えます。
- 学童期から、多くの教職員と接し、いろいろなことを学ぶことが豊かな人間形成に必要ではないかと思います。また、免許外で指導を行うよりも、教科担任制のもと、適切な指導が実施できるように、適正規模・適正配置を願います。
- 一つの学校に配属される教員数が増すことで、校務分掌が分担され、一職員の負担が軽減し、自己の学級へ力を入れられるようになるであろう。さらに、教員層が増すことで、勤務経験が浅い教員が学年主任をしなくてはならないと言った事態も減り、教員の育成にも繋がると感じている。
- 小規模になったとしても、地域とのつながりや伝統があるので、簡単に統合するべきではないと思う。
- （勤務する小規模校では）大きな規模の学校よりもきめ細やかな指導ができているとは自負していますが、大人の目が届きすぎってしまう環境で育ち、世間の当たり前を知らずに育つ自校の生徒達を見ていると不安で仕方ありません。高校や社会で適応していけないのではないかと心配です。地域の意向とは全く違うとは思いますが、きめ細やかな指導では、社会性は育ちにくいという、小規模校のリスクも知っていただきたいと思います。

【その他意見まとめ】

- 小学校低学年などの幼い子供については、通学の安全性等の事情から、地元の学校への通学を望む意見が複数ありました。
- さまざまな児童生徒の事情や教育ニーズ、地域特性等に対応するため、すべてを一つのルールに当てはめるのではなく、小規模校として存続する学校もあってよい、との意見が複数ありました。
- また、その場合の存続方法として、分校や学びの多様化学校、全市を通学区にする、などの提案がありました。
- 保護者、地域住民、教職員とも、小規模校の教育上の良さを訴える人、問題点を訴える人の両方の意見があり、子どもの性格・性質によるところが大きいことがわかりました。
- 教職員の負担という観点では、小規模校・大規模校それぞれに負担が大きいとのご意見が複数寄せられ、極端な規模の学校は、それぞれ事情は異なりますが教師の負担が大きくなることがわかりました。
- さらに、教員不足への対応や教師の働き方改革の推進、教科担任制などによる“教育の質の向上”という観点では、学校規模をある程度大きく（学校を集約）するための適正規模・適正配置が必要、との意見が複数ありました。

(2) 学級あたりの児童生徒数に関する項目

Q. 小学校の 1 学級あたりの児童数は、どの程度が望ましいと思いますか。

(単位：%)

No	回 答	全 体					小規模校(区)			
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	小学生 2,779人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	小学生 269人	教職員 147人
1	4 0 人程度	—	1.1	1.0	4.4	—	0.7	2.0	3.0	—
2	3 5 人程度	16.7	4.7	6.8	20.8	0.4	2.5	2.0	7.4	—
3	3 0 人程度	33.3	36.7	42.5	42.1	17.6	21.9	45.1	28.3	13.6
4	2 5 人程度	50.0	41.4	27.1	20.5	55.1	35.7	23.5	24.9	53.1
5	2 0 人程度	33.3	13.8	18.8	7.2	25.1	28.6	19.6	13.8	29.3
6	1 5 人程度	16.7	1.8	2.4	2.5	1.7	7.8	5.9	10.8	4.1
7	1 0 人程度		0.5	1.0	1.7	—	2.8	—	9.7	—
8	5 人程度		—	0.5	0.4	0.1	—	2.0	1.9	—
9	4 人以下		0.0	—	0.4	—	—	—	0.4	—

Q. 小学校の 1 学級あたり、少なくとも何人が必要だと思いますか。

(単位：%)

No	回 答	全 体				小規模校(区)			
		保護者 2,811人	地 域 207人	小学生 2,779人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	小学生 269人	教職員 147人
1	4 0 人程度	0.7	—	2.4	—	0.7	—	1.9	—
2	3 5 人程度	1.3	2.9	7.5	0.3	0.4	—	1.5	—
3	3 0 人程度	11.6	16.9	24.3	2.5	8.5	19.6	13.0	2.7
4	2 5 人程度	23.7	17.9	29.2	13.4	14.8	15.7	23.4	8.8
5	2 0 人程度	37.0	31.9	21.1	34.0	36.4	27.5	17.1	31.3
6	1 5 人程度	16.3	16.4	9.3	28.3	17.7	9.8	19.0	29.9
7	1 0 人程度	7.2	8.7	4.1	17.4	17.0	13.7	16.4	23.1
8	5 人程度	1.7	3.9	1.2	3.1	3.5	11.8	5.9	2.7
9	4 人以下	0.5	1.4	1.0	0.9	1.1	2.0	1.9	1.4

■全体回答：小学校の望ましい学級あたりの児童数は 25～30 人程度であり、少なくとも 20 人程度が必要。

■小規模校回答：全体回答と同様。

Q. 中学校の 1 学級あたりの生徒数は、どの程度が望ましいと思いますか。(単位：%)

No	回 答	全 体					小規模校(区)			
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	中学生 4,059人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	中学生 443人	教職員 147人
1	4 0 人程度	16.7	2.1	2.9	3.5	—	1.4	3.9	3.6	—
2	3 5 人程度	8.3	13.8	16.9	24.2	3.9	9.2	11.8	13.1	2.7
3	3 0 人程度	33.3	50.9	44.4	51.6	44.6	42.8	45.1	44.7	34.7
4	2 5 人程度	25.0	25.3	21.3	14.2	40.2	28.6	17.6	21.0	45.6
5	2 0 人程度	8.3	6.2	10.1	3.6	10.3	11.0	11.8	8.8	14.3
6	1 5 人程度(1 5 人まで)	8.3	1.2	2.9	1.4	0.9	5.3	5.9	5.4	2.7
7	1 0 人程度		0.4	—	0.7	—	1.4	—	2.9	—
8	5 人程度		0.0	1.0	0.2	—	—	3.9	0.5	—
9	4 人以下		—	0.5	0.6	—	0.4	—	—	—

Q. 中学校の 1 学級あたり、少なくとも何人が必要と思いますか。(単位：%)

No	回 答	全 体				小規模校(区)			
		保護者 2,811人	地 域 207人	中学生 4,059人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	中学生 443人	教職員 147人
1	4 0 人程度	0.9	1.4	1.8	—	0.7	2.0	1.4	—
2	3 5 人程度	3.8	3.4	8.2	0.8	1.8	2.0	3.8	—
3	3 0 人程度	24.9	23.7	31.3	9.0	24.7	23.5	20.3	5.4
4	2 5 人程度	27.5	26.1	29.1	24.5	22.3	19.6	28.0	22.4
5	2 0 人程度	28.8	24.2	19.7	35.9	27.2	27.5	25.5	38.1
6	1 5 人程度	7.9	10.1	4.8	15.7	9.5	7.8	11.5	19.7
7	1 0 人程度	4.7	5.8	2.8	11.3	9.9	7.8	6.3	11.6
8	5 人程度	1.2	3.9	1.2	2.0	2.8	7.8	2.7	2.0
9	4 人以下	0.4	1.4	1.2	0.8	1.1	2.0	0.5	0.7

■全体回答:中学校の望ましい学級あたりの生徒数は 30 人程度であり、少なくとも 20 人程度が必要。

■小規模校回答:全体回答と同様。

Q. 複式学級についてどう思いますか。

(単位：%)

No	回 答	全 体					小規模校(区)				
		保護者 2,811人	地 域 207人	小学生 2,779人	中学生 4,059人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	小学生 269人	中学生 443人	教職員 147人
1	問題ない・やむを得ない	43.6	25.6	60.7	57.3	29.4	41.3	23.5	55.4	54.6	23.8
2	複式学級を避けるための学校規模の適正化が必要	36.7	41.5	13.9	14.0	41.7	31.1	47.1	17.1	15.1	38.1
3	たとえ少人数になっても複式学級の編制は避けるべき	18.0	30.9	25.4	28.7	28.4	25.1	29.4	27.5	30.2	38.1
4	その他	1.7	1.9	—	—	0.5	2.5	—	—	—	—

■全体回答:教職員と地域は「複式学級を避けるための適正化が必要」が最多であるのに対し、その他は「問題ない・やむを得ない」が最多。

■小規模校回答:全体回答と同様。

■複式学級を良く知る教職員の回答は、「複式学級を避けるための学校規模の適正化が必要」とのご意見が最も多い。

【その他、学級当たり児童生徒数・複式学級に関する主なご意見】

<保護者>

- 教員の方に無理がないことが大事。
- 教職員・子供達のために、1学級の児童生徒数をあまり多くしないでほしい。担任の先生には、子ども一人ひとりをしっかりと見てほしい。
- 現在1クラス20人程度の学級ですが、先生が目が行き届き、子どもも落ち着いて学校生活を送れている。このくらいの人数が丁度良い。
- 特に徳島は公立学校がほとんどのため、公立の教育に力を入れる必要があると考えます。そのためには適正な数の教員を配置し、先生が集中して子供の指導に専念できる環境を作る必要があります。
- 子供の数が少なくなるのは必然なので、少人数制のクラス編成で複数クラスを維持し、クラス替えも行うのも良いのでは。
- (複式学級について) 知識や技能学習においては、ある程度年齢単位で授業が受けられる方が望ましいと思います。体験学習や総合学習においては、複式学級の形式も有意義かと思いますので、学年単位、複式の複合的な編制を組んでいただけるとありがたいです。
- 複式学級は地域によりやむを得ないが、学習方法の工夫は必要だと思う。
- 複式学級で問題のない学年もあると思うが、1年生、進学を控えた6年生は避けるべきだと思う。
- 複式学級が何かわからない。
- 複式学級で学年が異なる子供と一緒に授業を受けることで学習に遅れが出ないのか心配。

<地域住民>

- 児童数が減少して少人数学級になっても、それはそれで、よりきめ細かな学習や指導が行えるのではないのでしょうか。
地域の文化の拠点としても、現在の校区は変えないほうが良い。

<教職員>

- 教室には通常学級在籍児童＋特別支援学級在籍児童なので、通常学級の上限が35人でも実際は教室に35人以上の児童がいるのは指導しにくい。また、特別な支援や配慮を必要とする児童や保護者が増えているので、今よりも人数は少ない方が良いと考える。
- 1クラスの人数が多すぎて、子どもたちを一人ひとり丁寧に見ることができない。
- 徳島市民として、教育にはお金がかかるので、まちづくりの一部として計画的に行う必要があると感じる。教員としては、1学期内の児童は支援学級在籍児童を含めて30人まで、できたら20人台だと学習面・生活面の指導がしやすいと感じる。
- （複式学級）学習内容が違うのに、同じ教室にいるのは無理。
- 複式学級校に勤務した経験からですが、複式学級になると子どもたちの学習の進度に支障が出てしまうと思いました。どうしても自学自習の時間ができてしまいますが、よほど学習ができる子でないと自分で進めることができません。また、複式ではカリキュラムがきちんと組めていないと、習っていないということがでてしまう恐れがありますが、赴任してすぐにはそれを把握するのは難しい上に、他の先生方に聞こうにも分かる先生が異動でいらっしゃらないことのほうが多く、とても困った覚えがあります。また、いつも全ての学年がいるとは限らないので、その都度組み直す必要もあり、かなり大変でした。複式になると分かった、児童数がさらに減少していったという話を聞いたので、保護者も敬遠するのだろうなと思いました。
- 未来を担う子どもたちの健全育成のため、現時点で適正規模と言われる学校を含めて、少人数学級実現のための十分な教員配置をお願いしたいと思います。
- 一番の課題は、子どもたちの多様化・保護者ニーズの多様化に対応するため、1学級の人数を30人を上限としたり、特別支援教育に関わる職員数を増やしたりする等、現状に即応できる適正配置だと考えています。
- 今年度より、34人のクラスから25人のクラスへの配属となったが、細やかな指導のしやすさがあまりにも違う。学力補充や関わり方も踏まえると、一学級の上限人数を30人未満にしてほしい。
- 昔と現在では、保護者のニーズが変容しているため、30人以下の学級にさせていただき、子どもたちのための児童理解や、保護者対応を細かくしていきたいです。

【その他意見まとめ】

- 十分な目配りによるきめ細かな指導等、教育の質向上のために、少人数制のクラス編成を望む声が複数ありました。
- 複式学級について、保護者からは「複式学級が何かわからない」というご意見が多くあり、わからないまま“問題ない・やむを得ない”と回答された方が一定数存在していること、仮に複式学級の実態を理解されていたとしたら、結果が異なっていた可能性があることがわかりました。
- 複式学級に勤務経験のある教員からは、子どもたちの学習の進度への支障が生じることなどを不安視する意見がありました。

(3) 通学距離・時間等に関する項目

Q. 小学生の片道の通学時間は、どのぐらいの時間までが許容範囲だと思いますか。

(単位：％)

No	回 答	全 体				小規模校(区)		
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	教職員 147人
1	15 分未満	—	32.8	22.7	20.8	39.6	27.5	16.3
2	30 分未満	58.3	62.0	67.6	70.5	57.6	58.8	73.5
3	45 分未満	33.3	4.2	6.3	6.3	2.5	9.8	7.5
4	1 時間未満	8.3	0.5	2.9	1.5	0.4	3.9	2.0
5	1 時間以上でもよい	—	—	0.5	—	—	—	—
6	わからない	—	0.4	—	0.8	—	—	0.7

Q. 中学生の片道の通学時間は、どのぐらいの時間までが許容範囲だと思いますか

(単位：％)

No	回 答	全 体				小規模校(区)		
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	教職員 147人
1	15 分未満	—	16.1	7.7	6.2	18.4	5.9	5.4
2	30 分未満	8.3	69.3	62.8	66.0	70.7	70.6	68.0
3	45 分未満	33.3	11.0	20.3	20.5	7.4	11.8	21.1
4	1 時間未満	58.3	3.0	8.7	6.4	3.2	11.8	4.1
5	1 時間以上でもよい	—	0.2	—	—	0.4	—	0.7
6	わからない	—	0.4	0.5	0.7	—	—	—

■全体回答：片道の通学時間の許容範囲は、小学生・中学生共に 30 分未満であることがわかりました。

Q. 小学生の望ましい通学方法をお選びください。（3つ以内）

（単位：％）

No	回 答	全 体		小規模校(区)
		委 員 12人	保護者 2,811人	保護者 283人
1	徒歩	91.7	96.9	97.5
2	自転車	16.7	8.8	12.4
3	公共交通機関	41.7	12.9	7.4
4	スクールバス(通学支援タクシー)	66.7	29.1	27.9
5	家族の送迎	8.3	20.3	20.8

Q. 中学生の望ましい通学方法をお選びください。（3つ以内）

（単位：％）

No	回 答	全 体		小規模校(区)
		委 員 12人	保護者 2,811人	保護者 283人
1	徒歩	83.3	62.5	47.3
2	自転車	100.0	95.4	97.9
3	公共交通機関	50.0	23.5	15.5
4	スクールバス(通学支援タクシー)	50.0	16.0	20.5
5	家族の送迎	—	9.5	11.0

■全体・小規模校回答：小中学生いずれも小学校は徒歩、中学校は自転車が最多得票となりました。

【その他、通学距離・時間等に関する主なご意見】

<保護者>

- 教員不足を解消し学校教育の本来の役割を果たす意味として学校統合、学校を新しくしていくのが望ましいと思います。そのために通学距離、通学方法での課題ができるので交通手段がない地域、場所はスクールバス等を検討、公共機関の充実をしてほしいです。
- 通学時間、通学方法に無理がないようにしてほしい
- 小中学生が遠方から通学するのは危険。校舎の建替えにあたって、保護者の送迎スペース（駐車スペースではなく、乗り降りできるようなス

ース)を作るなどの検討もしていただきたいです。

- 統合により削減できた予算の一部はスクールバス運行に充てていただきたいです。保護者の送迎なく通学できる環境整備が必要と考えます。
- 子供の安全が一番だと思います。学校を減らすことがやむを得ないのであれば、通学や放課後の安全性を一番に考えて、最善の方法を見つけることが大切だと思います。
- 少子化の現状からすると、適正配置は必要かなと思います。ただ、小学校までの通学距離が遠くなると送迎の心配もあり、保護者の負担も増えると思うと不安も大きいです。中学生はある程度自分で通学ができると思いますが、小学生のうちは自力通学の手段も限られているので、その点も考えていただけるといいと思います。
- 小規模校をなくし、スクールバスを運行してほしい。集団下校もなく交通量が多いため小学生が歩くには危険すぎる。
- 小学校低学年は、学校が適正配置されることで、通学の距離や時間が増えたり、学校が終わった後、学童などの施設が十分に利用できるか心配である。中高学年になると気を付けることが理解できるのでそれほど心配はなくなる。それよりかは、学校の体制を整えてほしいという考えが強くなると思う。
- 学校の統廃合により、小学生の通学時間が30分以上になってしまう場合、スクールバスを利用できるようにしてほしい。

<保護者>

- 他国ではスクールバスの導入や親御さんの送迎は一般的です。また仕事をしていると自分の居住地の校区が逆に不便です。何かあっても迎えに行くのに時間もかかります。校区の縛りはもっと寛容であるべきだと思います。

<教職員>

- 統廃合を目指すならば、離れた学校に通うためのスクールバスのような交通手段や安全対策が不可欠となる。
- 小規模校を維持するのにも多くの経費がかかるため、地区の拠点校を設定してスクールバスで通えるようにしたり、本人や保護者が隣接の校区の学校を選択できるようにしたりして、通学の負担を減らし、適正規模の学校を実現させると良い。

【その他意見まとめ】

- **適正配置にあたっては、通学時間や距離・通学方法に無理が生じないよう、配慮を求めるとご意見が多数ありました。**
- **学校の統合により遠方からの通学を余儀なくされる子供のために、スクールバスの運行(特に小学生)を希望する声が多くありました。**
- **一般的な通学手段として保護者の送迎を認めた上で、建替え等の際、保護者の送迎用駐車スペースの設置を要望する提案がありました。**
- **小学生については、学童など、学校が終わった後の居場所の確保について心配するご意見がありました。**
- **適正配置後の校区設定について、自宅からの通学しやすさや安全性を判断基準とした合理的かつ柔軟な対応を求めるとご意見がありました。**

(3) 適正規模・適正配置で重視すべき項目

Q. 学校の適正規模・適正配置で重視すべき点は何ですか。（その他を含め3つ以内）

（単位：％）

No	回 答	全 体				小規模校(区)		
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	教職員 147人
1	児童生徒・学級の規模(数)	58.3	54.6	46.9	66.4	46.3	41.2	58.5
2	通学距離・通学時間	41.7	66.3	59.9	55.4	63.6	52.9	51.7
3	通学路・通学方法の安全性	16.7	53.8	41.1	38.9	51.2	37.3	34.0
4	現在の校区の維持	8.3	10.7	18.8	6.8	13.8	19.6	10.2
5	学校と地域コミュニティのつながり	8.3	11.3	30.0	20.6	17.7	33.3	27.2
6	地域の意向	16.7	3.3	14.0	11.7	5.3	25.5	17.7
7	保護者、子どもたちの意向	50.0	36.6	34.8	34.3	41.7	29.4	40.8
8	人口やまちづくりの将来ビジョン	50.0	9.2	20.3	13.7	10.2	29.4	17.0
9	その他		0.5	0.5	0.4	0.7	2.0	—

- 全体・小規模校ともに、教職員が重視すべきとしたのは“児童生徒・学級数の規模”であり、これは、教育の質とともに、教員負担の適正化に主眼を置いたことによるものと推察します。
- 一方、保護者や地域は全体・小規模校の区別なく、“通学距離・通学時間”を重視すべきとしており、これは、子どもや保護者の体力的・時間的負担の増加を心配していることや、学校の適正化に伴い校区が拡大されることにより、通学の安全性が損なわれることへの不安によるものと推察します。

【その他、適正規模・適正配置で重視すべき項目に関する主なご意見】

<保護者>

- 好きな学区を選べる
- 校区関係なく自宅から一番近い学校に通学させてあげたい。通学だけで疲れてしまうのは本末転倒だと思う。
- 児童生徒数が多い学校と少ない学校が隣接しているため、校区割を工夫してほしいと思います。
- 学校が合わなければ、適宜転校できる体制があればよい
- 小中学校が統合によりなくなる場合は、保護者がどこに通わせるかを選択できる方が良いと思う。校区制により、通学先の学校を地域で決められると困ると思う。距離だけでなく、通学路の安全性や放課後の居場所等を考慮して決定したいため。
- 急に統合するのではなく、10年後などと定めて報告してからでなければ「学校から近いからここに自宅を建てたのに」という人が出てくる。
- 今後の持続可能な行政サービスを考えると、限られたリソースによる効率的な運用が喫緊の課題であり、居住地区の集約によるスモールシティを目指す必要があります。学校のある地域に世帯が集まることから、将来のまちづくりのビジョンとあわせて学校の適正配置を推進する必要があります。
- 不登校の子の居場所を作ることも考えてほしい。
- 地域の文化を子供達に継承していくことは大切。
- 学校統合したとしても、昔から続く地域の行事などは引き継いでいけるようにしてほしい。
- 大規模校は学区の見直しや、定員を決めるなどの対策をしていただきたい。
- 少子化、人口減少などで、教員が足りないと言われますが、教員の業務の質を下げない工夫をしてほしいです。
- 学校の適正規模を考えるにあたり、そもそも過疎地域の問題に抜本的に取り組まなければならない。学校の問題はそのうちの一つで、インフラや災害時の備えという意味でも居住できる地区を制限するような大規模な改革を行わない限り、自治体が立ち行かなくなることは目に見えている。
- 先生方あつての学校現場です。人口減少は、子どもたちだけの問題ではなく、教職員の減少も考慮して総合的に取り組まなければならない課題です。先生方がどのようなカリキュラムであれば子供達の学びを深め持続的な教育現場を形成できるかが問われていると思います。無理なく有意義な学び舎を先生方から発信していただき、それを前提に適正規模・適正配置を検討することを求めます。
- 古くなっている校舎を随時立て直して防災に備えてほしい。大規模震災で壊れないか心配。
- 学校は地域の防災拠点になるので、最新の設備を備えた施設を整備することは子供だけでなく地域住民にとっても必要なことである。
- 学校の統廃合により、避難所として使えなくなるのは問題だと思う。
- 地域の衰退についても考えてほしい。

- 単なる統廃合でなく、佐那河内小中学校（小中一体型校舎での小中一貫教育の実践）みたいな形で地域に残す方法も検討していただきたい。
- 学校施設の老朽化は目に余るものがあります。学校再編と建替えは急務だと思いますのでとにかく急いでもらいたいです。
- 子供達の通学の安全を第一にしながら、ある程度の統合は仕方ない。でも地域の防災拠点にもなるので、地域の状況によりバランスを考える必要がある。
- 土砂災害などの危険地域にある小学校などは積極的に統廃合するべきだと思う。
- 先生の働き方改革も進む中、1つのクラスを1人の担任にするのはどうなのかと思います。教員の方は大変ではないでしょうか。
仕事でも1つの仕事をチームでこなすので、学校も同じように1つのクラスを何人かで担任してはどうでしょうか。
- 子供の数が激減し、学校施設も老朽化している今、学校の規模や数を見直すことは避けられない現実です。でもそれは、「学校を減らす」というネガティブな話ではなく、子どもたちの学びの質を守るための前向きな選択であるべきです。
- 統廃合後の敷地は大規模な公園等にし、地域住民が使用できるようにすると、町の賑わいにもつながるため、反対意見も薄まると思う。
- 廃校となった後も、跡地に地域交流の場として、規模は縮小されても何らかの施設は作ってもらいたいです。
- 統廃合後の施設を壊すのか、活用するのか中途半端にしないほしい。将来、どのような徳島にしていくなか計画的に進めてほしいと思います。

<地域住民>

- 少子化が進む中、どのような状況になろうとも子供達第一であれば良いと思います。
- 子供の年齢別人口情報や学校運営維持コストなど、議論すべき情報をもっと知らせるべきだと思う。
- 学校の現状をしっかりと検討した上で保護者や地域の声もよく聴いて、地域の活性化を尊重しながら取り組んでいくべき。

<教職員>

- 適正規模に見直す中で、施設設備の老朽化に対応してほしい。
- 適正規模のための統合はやむを得ない部分はあるが、通学距離や時間が児童生徒・保護者の負担にならないこと（スクールバスの運行等）や中学校区を基準にした地域への配慮が必要だと思う。
- 授業、生徒支援、生徒指導のしやすい校舎の新設を考えるべき。校舎が変われば生徒は変わります。良い校舎は成績も生徒指導も可能にします。
また、その逆も然りです。
- 可能な限り現状を維持していただきたいのですが、やむを得ず統廃合を行う際には地域・保護者の意見にも配慮をお願いいたします。
- 子供・教員数が少ない地域では、義務教育学校を開校し、小中両方の免許を持つ教員を配置し中学校の免許外教科担任の解消・小学校の教科担任

制を進めるとよいのではないかと考えている。

- バス通学にして小規模校をなくしていくべき。

小規模校をなくすことで、その分の教員を他の学校に振り分けることができ、教員不足の解消と、教員の働き方の改善も期待される。

- 教員の絶対数が足りていない現状と、教員の疲弊感を考えると、働ける教員数と児童生徒数のバランスの取れた配置・区割りを強く望みます。
- 適正規模・適正配置について考えてくださるのはうれしいのですが、業務の削減や教員の増加、学級の上限人数についてもご配慮ください。
このままでは、教員の負担ばかり増え、教員になりたい人や教員の質も低下すると思います。

【その他、適正規模・適正配置で重視すべき項目に関する主なご意見のまとめ】

- 学校規模の適正化の手法として、現在の校区の見直し(隣接する大規模校と小規模校のバランス調整等)や、校舎一体型の小中一貫校、義務教育学校などへのご提案がありました。
- 学校を統合する場合、10年前に市民への周知を開始するなど、余裕をもたせたスケジュール管理を求めるとのご意見がありました。
- 適正配置は、行政サービスの持続性の観点から、将来のまちづくりビジョン等と合わせて計画的に推進する必要があるとのご意見がありました。
- 不登校の子の居場所づくりについてのご要望がありました。
- 適正配置を検討する上で、地域の文化や地域との繋がりをどのように継承していくか、また、地域の衰退への対応についても考慮する必要がある、とのご意見がありました。
- 適正配置は「学校を減らす」というネガティブな話でなく、子供たちの学びの質を守るための前向きな選択であるべき、とのご意見がありました。
- 適正規模・適正配置を検討する際には、子どもたちの学びを深められる持続的な教育現場について先生方にご意見をいただきながら進める必要がある、とのご意見がありました。また、チーム担任制へのご提案がありました。
- 学校の防災力を高めるために、適正配置に合わせて老朽化した校舎の建替え等、施設の老朽化への対応を望むご意見がありました。
また、土砂災害などの危険地域にある学校は積極的に統廃合するなど、ハザードマップを考慮に入れた適正配置へのご提案がありました。
- 統廃合後の施設や敷地について、今後のまちのビジョンと合わせた計画的な活用を求めるとのご意見がありました。
- 検討の進め方について、子供の年齢別人口情報や学校運営維持コストなど、議論すべき情報の積極的な共有についてご要望があったほか、学校の現状把握のもと、保護者や地域、教職員などの関係者の意見を良く聴いた上で、地域の活性化を尊重しながら取り組むべきとのご意見がありました。
- 近年の教員不足や教員の多忙化の状況を踏まえ、教員配置と児童生徒数のバランスを考慮した適正配置についてのご要望がありました。

Q. 地域の一員として(コミュニティが)学校に求める機能は何です(と思います)か。(その他を含め3つ以内)

(単位：%)

No	回 答	全 体				小規模校(区)		
		委 員 12人	保護者 2,811人	地 域 207人	教職員 746人	保護者 283人	地 域 51人	教職員 147人
1	子どもたちが快適に学習できる環境	83.3	91.5	89.9	93.8	92.9	86.3	96.6
2	子どもたちの放課後の居場所・活動場所	25.0	50.7	47.8	30.7	45.6	41.2	29.3
3	地域の文化・スポーツ活動の拠点	50.0	22.2	35.7	22.4	23.3	—	29.3
4	地域の生涯学習の拠点	25.0	7.2	13.5	10.2	7.8	9.8	9.5
5	地域の子育て支援施設としての機能	33.3	20.7	27.1	18.1	20.1	25.5	17.0
6	地域の高齢者福祉施設としての機能	—	0.8	3.4	0.9	1.1	3.9	1.4
7	地域の障害福祉の拠点	—	1.4	1.0	1.3	0.4	—	1.4
8	地域防災の拠点	66.7	31.1	37.7	32.8	26.9	41.2	38.8
9	選挙の投票所	—	0.8	0.5	1.3	0.7	—	0.7
10	行政窓口サービス等の拠点	—	0.6	1.0	0.3	1.1	3.9	—
11	その他		0.4	1.4	0.3	0.4	2.0	0.7

■全体・小規模校ともに、学校に求める機能は「子どもたちが快適に学習できる環境」が最多得票、次いで、「地域防災の拠点」となりました。
また、「子どもたちの放課後の居場所・活動場所」や「地域の文化・スポーツ活動の拠点」などと回答された方が多くおられました。

2 答申書(素案)

令和7年8月●日

徳島市教育委員会 様

徳島市立学校適正規模・適正配置等検討委員会

委員長 小 川 宏 樹

市立小学校及び中学校の適正規模及び適正配置等に関する答申書

令和7年4月28日付、教学発第692号で徳島市教育委員会から本検討委員会に諮問のあった事項について、慎重な審議を経て意見を取りまとめたので、下記のとおり答申いたします。

記

諮問事項

徳島市立小中学校の適正規模・適正配置及び通学区域に関すること

- (1) 徳島市の小中学校における望ましい学校規模
- (2) 徳島市の地域特性等を踏まえて配慮すべき事項
- (3) 望ましい学校規模の実現に向けた具体的方策
- (4) 望ましい学校規模の実現にあたって留意すべき事項 など

諮問に対する答申

1 徳島市の小中学校における望ましい学校規模

(1) 適正規模

- 徳島市の学校規模については、

- ・小学校 12～18学級（1学年あたり 2～3学級）
- ・中学校 9～15学級（1学年あたり 3～5学級）

が、適正な規模であり、

- ・小学校 6～12学級（1学年あたり 1～2学級）
- ・中学校 6～9学級（1学年あたり 2～3学級）

を下回る場合は、統廃合も含め、規模の確保に向けた検討を行うこと。

- 学級規模においては、教育の質の向上の観点から、小中学校ともに国の基準を下回る25人～30人学級が望ましく、20人を下回らない規模の確保に努めること。

また、正規教員の確保及び各学校における教員層の充実を図るため、学校の適正規模の確保に努めること。

(2) 適正配置

- 通学の安全確保を前提とし、小中学校ともに概ね30分以内に通学できる範囲が望ましい。
- また、通学距離については、小学校は徒歩で換算し、片道、概ね1.5km以内、中学校は自転車で換算し、片道、概ね4km以内が望ましい。
- 適正配置の検討にあたっては、通学時間や距離・通学方法に無理が生じることのないよう考慮するとともに、通学時間や距離が本答申で定める適正な範囲を超える児童生徒を対象に、スクールバスなどの通学支援策について検討すること。
- また、適正配置後の学校区については、子どもの通学のしやすさや安全性等を判断基準に加え、合理的な設定とすること。

2 徳島市の地域特性等を踏まえて配慮すべき事項

(1) 徳島市の現状

- 人口減少や少子化の進行が加速化するなか、学校数が多く、また学校施設の老朽化が著しい現状を踏まえ、子どもたちの安全や市民の将来負担を考慮し、早急に適正な規模・配置に向けた取り組みに着手すること。
- 学校は地域の拠点としての役割を担う市の重要施設であるため、適正規模・適正配置に向けた検討にあたっては、徳島市のまちづくり計画である「徳島市都市計画マスタープラン」や「徳島市立地適正化計画」との整合を図りつつ、検討を進めること。
- 学校だけでなく、徳島市の多くの公共施設が老朽化しており、近い将来、更新が必要となる見込みであることから、学校の適正規模・適正配置に向けた検討と合わせ、学童保育施設や認定こども園、コミュニティセンター等の他の公共施設との複合化の可能性についても主管部局と連携し、検討を行うこと。

(2) 地域のなかの学校施設

- これまで小中学校が担ってきた地域の拠り所としての役割や繋がりを貴重な財産として継続できるよう、既存の校区を分断することなく、適正な規模の確保に努めること。
- 学校の統廃合を実施する際は、統合するすべての学校の地域との連携が新たな学校においても継続されるよう、統廃合の準備段階から関係者の意見を広く聴き、円滑な学校区の移行に繋げること。

(3) 地域で育てる地域の宝

- 不登校や放課後児童に対応する施設や取り組み、また登下校時の見守りなどに協力いただいている地域活動組織や学校運営協議会（コミュニティ・スクール）などに広く意見を求め、複合施設としての学校の在り方を検討するなど、市長部局との連携のもと、地域の基幹公共施設としての質を高め、子どもたちの学習環境整備とともに、まちづくりの観点を加えた適正規模・適正配置を目指すこと。

3 望ましい学校規模の実現に向けた具体的方策

(1) 複式学級

- 子どもたちのより良い学習環境の確保や、教職員負担を増加させないため、複式学級の導入は避けること。また、それに必要な教員の加配措置などの施策により、小規模学級として、子供に不利益とならない運営に努めること。

(2) 小規模校としての学校の存続

- 望ましい学校規模の実現は、将来にわたり持続可能な子供たちの教育環境の充実に目的に行うものであり、児童生徒の多様な教育ニーズに対応するため、十分な検討を行った上で必要性が認められる場合は、小規模校としての存続を検討すること。
- その場合は、小規模校としての運営方式や期間などの存続条件を定めるよう努めること。
- 小規模校は教員の業務負担が過大となる傾向があるため、運営にあたっては、保護者や地域の協力体制を整備し、児童生徒や教職員の不利益とならないよう努めること。

4 望ましい学校規模の実現にあたって留意すべき事項

(1) 学校(教育)に望むこと

- 学校においては、規模などに関わらず、基礎的な知識や技能、生活のなかで必要な学力や能力を身に付け、思いやりや互いに協力し合う力とともに、自主性や自立を育むことのできる学習環境であること。

(2) 関係者との合意形成

- 一定の学校規模の確保策を講ずる場合においては、地元地域をはじめ保護者や関係者への丁寧な説明による合意形成に努め、将来世代のより良い未来・持続可能な地域づくりに繋がることを理解いただけるよう努めること。

5 付帯的検討事項

(1) プール施設(水泳授業)

- 小学校では、将来にわたり様々な手法・場所において実技学習を継続できるよう、検討を進めることとし、既存のプール施設については、維持修繕に努めること。
- 中学校では、座学の履修は継続するものの、実技および学校プール施設については、廃止を含め検討すること。

(2) 学校給食調理場

- 老朽化が著しい学校給食調理場について、保護者負担の適正化、施設コストの削減、行政サービスの安定性・持続性、施設整備に要する期間等の観点から、最も妥当な更新方法を検討する。その際、現状の自校調理方式だけでなく、施設の集約化・共同調理場方式への転換（センター化）等を含め、検討すること。

(3) 校舎・学校プール・学校給食調理場などの既存施設について

- 統合・廃止により利用を終了した施設の活用方法を速やかに決定すること。

以 上